

カウンセリングと宗教性 : 魂の居場所を求めて

著者	加藤 廣隆
雑誌名	真実心
巻	38
ページ	151-171
発行年	2017-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000837/

カウンセセリングと宗教性

——魂の居場所を求めて——

加藤 廣 隆

神仏はカウンセセリングの名人

こんにちは。今、身に余る紹介をいただきました加藤廣隆でございます。釘抜地藏しやんぼくじしの住職をしております。臨床心理士でもあります。そして、お坊さんのカウンセセラーでもあります。

釘抜地藏のお寺は空海弘法大師が開山されました。もう後三年で一二〇〇年になります。非常に古いお寺で、元は真言宗、今は浄土宗に属しています。空海弘法大師が、唐（中国）から石を運んでこられて、その石を自分で彫られたお地藏さんをお祀りしているお寺です。「心や体にある苦しみの釘を抜いてくださる」ということで、釘抜地藏と呼ば

れるようになりました。今日、みなさんの前でお話できることを大変に光栄に思っております。どうぞ、よろしくお付き合いください。

私どものお寺にお越しになる方は、お参りになる方も、カウンセリングに来られる方も、浄土宗の方もあれば、浄土真宗の方もあれば、日蓮宗の方もあれば、禅宗の方もあれば、新興宗教の方もあります。カウンセリング・ルームにはクリスチャンの方もお越しになります。今日は、広く「宗教性」を大切にする立場でお話をしたいと思います。

まず、みなさんに問いかけてみたいと思うのですけれども、悩みも、苦しみも、全くない。悩みの欠片もないという人はいりますか、どうでしょうか。そんな人おられないでしょうか。なにか、悩み、心配事があるんじゃないでしょうか。もし、全く、悩みも、苦しみも、心配事もなかったら、それは神さまか仏さまですね。みなさんは女性ですから、女神さまですね。そういう人はおられないと思うんです。もしも、おいでになったら、その方は、女神さまか、よっぽど鈍感な人です。

少々の悩みや苦しみは、「よし、それを乗り越えよう」と、生きる活力になりますよね。しかし、大きな心の悩み、心に釘が刺さったような悩み、それはもう大変です。まず、苦しくて心が傷つきますよね。そして、心を締めつけます。そして、心の自由をなくしま

カウンセリングと宗教性

す。苦しくて、苦しくて、心から血が流れてるという状態になるのです。そういう苦しみ、苦悩を癒してくださるのが、神さま、仏さまなのです。

これも突然ですが、人間と動物の決定的な違いって分かりますか。決定的な違いです。人間と動物の決定的な違いは、祈れるか、祈れないか、です。祈りができるのは人間だけなのです。うちはお地藏さんのお寺です。毎日、毎日、朝に開門してから夕方に閉門するまで、どなたかがお参りになっているというお寺です。だから、犬や猫を連れてお参りになる方もあるのです。でもね、住職をやって五十年、一度も犬や猫が、ご本尊さんの前で手を合わせて拜んでいるのを見たことがないのです。にゃんとも、わんとも言いません。中には、犬を抱えてきて、お参りして、「まんまんさんあん、しなさい」って、犬の頭をくつと押さえてはるけれど、犬は迷惑そうだね。恨めしい顔をしています。それはそうでしょう。犬は祈れないのです。猫も祈れないのです。人間だけが祈れるのです。祈りの中で、仏さまと直接対話、会話ができたなら、人間は癒されます。祈りの中で仏さまから智慧をもらえるからです。そこに、心の癒しが生まれて、納まりがつくのですね。

みなさん、仏さまの耳って見はったことある？ いっぺん良く見てください。仏さまの耳は大きいのです。何で大きいか。みなさんの心の声を、聞いてあげよう、聞いてあげよ

う、と思って大きくしてはるのです。仏さまはね、「うんうん、そうか、そうか」「ほんまやなあ」「そら、そうやわなあ」「そら、辛いなあ」「そら、心配やなあ」「そら、悲しいよなあ」と、黙って聞いてくれはります。仏さまに「うんうん、そうか、そうか」って聞いてもらえたら、心は癒されます。納まりますよ。だから、仏さまはカウンセリングの名人なのです。カウンセラーの達人です。

私はそのことをよく知っていますから、ときどきお地藏さんにカウンセリングを受けます。「これはえらいこっちゃ、どうにもならん」「この思いをどうしたらええんか、わからへん」という時には、お地藏さんの前に行って、手を合わせて祈ります。祈りながらお地藏さんに自分の心の内を語りかけます。そうすると、お地藏さんは黙って「うんうん、そうか、そうか」って聞いてくれはるのです。

すると、はっと、「ああそうか、そういうことか」「そうやったんや」「そう思ったら、ええのやなあ」と、お地藏さんから答えをもらったような気になります。これは、黙っておられるお地藏さんから、智慧の音が聞こえてきたという感じなんです。そうすると、心は納まりますし、腑に落ちます。本当にすーっと納まるんですよ。大変に嬉しいことです。だから、お地藏さんはうちでトップのカウンセラーです。私はセカンド・カウ

カウンセリングと宗教性

ンセラ―です。しかし、「まだお地蔵さんと直接対話ができないのです」「今は、生身の人間に聞いてほしいのです」という人もおられます。そういう人が、私のもとへお越しになるのです。

魂のはたらきと縁

こうやって、お寺でカウンセリングを続けて来ていると、魂、あるいは、魂のはたらきというものがあるのだということを感じる時があるのです。魂と魂のはたらきを大切に考える必要があると思われるのです。しかし、「魂ってどんなもん？」と言っても、それぞれの思いが違ふと思えますので、今、私がここで言う魂を説明したいと思えます。

魂とは、私たちの心の奥深くにあつて、それが抜けてしまつたら私ではなくなつてしまふものです。「これが私だ」と言える中心、核のようなものです。魂があるから、私たち人間は「これが私だ」と言えて、一人の人間として統合が取れるのです。「魂が抜けたみたいなのやね」というのは、ほわあ〜として、目もどこかうつろで、心はどこにあんのや、身体はどないなつてんのや、わからへんっていうような、心と身体がバラバラになつ

たような人です。それが魂が抜けたような状態なのですね。だから、魂があるということ
は、私という一人の人間が、心と身体を持って、一人の個人としてちゃんと存在してま
よということですよ。

魂のはたらきって何かと言ったら、さっき私はお地藏さんと会話をするといいました
が、お地藏さんと会話をさせてくれたり、会話をし、お地藏さんから智慧をもろたな
あと思えるのが魂のはたらきです。そういう魂のはたらきがあつて、腑に落ちたような納ま
りが生まれるのです。これが魂であり、魂のはたらきです。人間であれば誰でも、神さま
や仏さまとお話をする能力を持っています。魂はその能力の一番の元みたいなものです。
「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」と唱えて、仏さまとご縁を作る元です。そういう魂
と魂のはたらきは誰でも持っています。

魂のはたらきはもう一つあります。私たちにとつてもものすごく意味のある、縁、「不思
議なご縁をいただきました」「あの人とは縁があるわ」の縁、この縁を結んでくれるのが
魂のはたらきなんです。

私の知り合いの五十代の女性の方なんですけど、二十代のときのこと、東京から京都に
新幹線で帰ってくるのに、乗り遅れて、予定とは違う電車に乗って帰ってきたのです。電

カウンセリングと宗教性

車は込んで隣に男性が座ったのです。「いややわ、男の人座らはったわ」って思ったんやけど、またその男の人が、何やかんやとしゃべりかけてくる。「いややわあ」と思いながら、適当に返事していたのやけど、東京から京都の間、長い。うちに、だんだん、だんだん、親しなってね。付きあいがはじまって、で、いよいよ、結婚しようつとなって。お母ちゃんが「あんた、新幹線の中でナンパされた人と結婚すんのかいな」って怒っていたが、それから三十年たった今、二人は仲が良い。すごく仲が良い。「不思議な縁やったわ」って彼女は言います。「あの時、電車に遅れへんかったら、この人と会うことあらへんかった」。こういうのが縁ですね。みなさんも、どうぞ良いご縁をいただかれますように。縁は不思議です。縁は大切に意味深いものです。

こういう話をしたらいくつもあるんですが、もう一つ。これも電車の中です。毎朝の電車に一本遅れて、これも遅れるんです。出勤せんなんって急いでしたのです。電車に乗ったら混んでいて、カーブでがっつと揺れた時によるめいたんよね。で、隣に立ってはった男の人の足をヒールで踏んだんです。そうしたら、男の人は「痛い！」って、ものすごく睨みつけはるわけです。で、「ごめんなさい」って謝ったんやけど何か不機嫌そう。で、降りたら一緒なんやね。一緒のところで降りて、一緒の方向に歩いていったんです。隣の会社に

勤務してる男性やったんです。この二人も結婚して、今も仲が良い。これも縁ですね。不思議な縁やなあ。こういう縁を結ばせてくれるのは魂のはたらきなのですが、「縁は大切ななあ」「縁は不思議や」「良い縁に出会えたなあ」と思うことができるのも、魂のはたらきなのです。

「物語」の創造

カウンセリングをしていると、クライエントと神や仏との縁が生まれたり、クライエントに不思議な偶然による縁が生まれたりすることがあります。不思議な縁が生まれた時は、不思議なお話、物語と言っていいものが生まれてきます。これは、カウンセリングルームにお越しになった方の、不思議なお話、物語です。

三十代の独身女性Aさんは、熱心な神道の信者さんです。Aさんは京都見物が大好きで、JRに乗って一人で京都にお越しになります。ある日、大徳寺に来て、大徳寺の山内つてすぐく広いんですね、塔頭たっちゅう(大徳寺の子どものお寺)がいっぱい並んでいて、中に拝観できるところがいくつもあります。Aさんはそれを半日かかって廻られたのです。で、

カウンセリングと宗教性

廻って、さあ帰ろうと思われたのです。大徳寺から北大路通りに出て京都駅に帰ろうとすると、左側に行くバスに乗ることになるのです。でも、ふと、「今日はちよつと歩こう」と思わはった。で、左に行ったら京都駅に近いのに、ふと、右の方向に歩こうと思わはる。そして、千本北大路まで来た時に、ふと、「ここを南に下がろう」と思わはる。千本通りをてくてく歩いて、大徳寺から三十分ぐらい経ったら、うちの寺です。うちの寺は間口がものすごく狭いのです。普通のおうちぐらいしかありません。通り過ぎしてしまいそうですね。ふと、ふと、ふと、ふと、「あれ、こんなところに寺があるわ」と思われた。それで、ふと、お参りしたくなって、本堂の前でお地藏さんに手を合わせて、「これで良かった」と帰ろうとされたんですけれど、参道へ出ると「カウンセリング受けますよ」って貼り紙があつて、それが、ふと、目に入ったのです。

彼女は、後からわかることなのですけど、子どもの頃からお母さんとの葛藤があつて、女性性に傷つきのある方でした。女性として生きづらい思いをしてこられたのです。そういうことがあつただけで、カウンセリングを受けようと思ったことは一度もなかったのに、ふと、「一回でいいから話を聞いてもらおうかな」と思つて、もういっぺん事務所に戻らはるのです。そして、たまたま僕が、その日は十分に時間があつて、「遠くから来

てはるのなら聞きましようか」と思ったのです。一回だけで終わろうと思っていたカウンセリングが、その後続いていきました。

今まで「ふと」という言葉を何回言ったかなというぐらい、ふと、ふと、ふと、という偶然の重なりですね。バスに乗ろうと思っただけど歩いた、道路の反対側を歩いた、千本北大路で曲がった、お寺に気づいた、お参りしようと思った、カウンセリングルームの貼り紙に気がついた、たまたま私にも時間があった。これは本当に偶然に重なり合いです。こういうのを縁と言います。このような縁が生まれるのはまさしく魂のはたらきです。ふと、ここ曲がろう、ふと、お参りしよう…、「ふと」と思った時に魂がはたらいてるんです。人にとってあとで「あ、そうやったんや」って腑に落ちるような、深い意味のある偶然といえる、不思議な縁は魂のはたらきによって導かれるんですね。Aさんは魂のはたらきによってカウンセリングとの縁を結びました。

Aさんは、子どもの頃から女性性に傷を持っておられました。それで、生きづらい思いをしておられたのでカウンセリングが続いたのです。「自分は神道の信者なのに、どうしてここに来ることになったのか」という疑問を持ちながら一年が経った頃、Aさんは面接を待っている間、いつものようにお地藏さんにお参りをされたとき、ハッと気づかはるの

カウンセリングと宗教性

です。で、「どうして神道の信者の私がここに来ていいのか、気づきました」と、私に不思議なお話をされたのです。「私が信仰している神さまが、こちらのお地藏さんと話を合いをなさったんです。その話し合いがまとまって、神さまとお地藏さんで、私を癒すために、ここに来るように導いてくださったんです。あ、そういうことだったんだと気がついたので」と、まことに穏やかな顔で、「自分の信仰している神さまと、こちらのお地藏さんからお告げをいただいたんだから、当然だ」と言わんばかりの顔で座っておられました。このことがあってから、カウンセリングがぐっと深まっていきます。自分の女性性の問題や、母親との問題を深めていかれて、自分が女性であることを大事に、大切にしている、とじていられるわけです。この時にAさんが語った「うちの神さまと、こちらのお地藏さんが話をなさってね」というのは、物語ですね。そうでしょ。神さまと仏さまが話し合いをするというのは、まさしく物語です。こういう物語が生まれると、カウンセリングは進み、深まっていきます。なぜかと言うと、魂のレベルでカウンセリングを受けることにおさまりが生まれているからです。

人間ってね、頭で考えて、心で感じて、魂のレベルで腑に落ちるんです。水は何度で沸騰すんの？ 一〇〇度ですね？ 水が一〇〇度で沸騰するのがわかるのは、頭やね。知識

として知っている。「実は、私の母が死にましてね、本当に悲しいんです」「そら、そうやね。本当に悲しいよなあ」というのは、心です。「死んだ母が、今、私の胸の中にいるような気がする。そして時々、私に話しかけてくれる。そんな時はものすごくほっとするし、嬉しいし、懐かしいのです」「そら、そうやなあ。深いとこで、ほっとして納まるよねえ」、これが魂のレベルです。「水は何度で沸騰すんの?」「そら、悲しいわなあ」って合います? 合わないですよ。「実は、私の母が死にましてね、悲しいですわ」「ああ、そら、乳癌の再発で、それもだいたい手遅れだったから、亡くなられたんですよ」「これは、心のことを頭で答えたのです。そう言われたら、悲しさを受けとめてもらえていないですよ。だから、心のことは、心で受けとめないといけないのです。「死んだ母が私の心の中にいてね、時々話しかけてくれるんです。すると、ものすごく嬉しいし、ほっとするんです」「そら、おかしいわ。そら、妄想やで」こんな受けとめ方されたら、辛いね。

こういうように、頭のこととは頭で、心のこととは心で、魂のことは魂で、ちゃんと応えてあげることが、人間にとっては大事なのです。「私の胸の中にお母さんがいて、時々私に話しかけてくれるんです」っていうのは、物語ですね。ファンタジーです。「胸の中にお母さんがいるはずないやろ。死んだお母さんが話しかけてくるなんてあり得ない」と思う

カウンセリングと宗教性

ほうがおかしいでしょ。物語は物語として聞かなあかんわけです。

『桃太郎』のお話を知ってるでしょ。「おじいさんは山へ芝刈りに行って、おばあさんは川で洗濯に行った。そうしたら大きな桃が流れてきて：桃から生まれた桃太郎：」それを聞いてね、「人間が桃から生まれるって、そらおかしいで」「誰が見たんや、妄想と違うか」って言うていたら、物語読めません。スターウォーズなんか見られませんか。「遙か昔、銀河系の彼方で：」。こういうのは物語をちゃんと感じられるかどうかです。「そら、おかしいで」「そら、違うで」「桃から人間が生まれるなんておかしいで」って言う人がいたら「そっちの方がよっぽどおかしいで」ということですよね。

魂のはたらきによって作られた物語がカウンセリングルームで語られる時、「胸の中にお母さんがいて時々話しかけてくれると嬉しいんです、ほっとします」というお話には、「そら、そうやるな。ほんまやなあ」という思いで聞くわけです。Aさんの話しを、「神さまとお地藏さんが話し合ひしはったんや。うお、そうなんや」という思いで聞くわけです。「うわあ」「おお」「そうか」というのは、頭のレベルでも、心のレベルでもない。もう少し深いところで聞いているのです。クライエントとカウンセラーが魂のレベルで物語を味わってるわけです。そうやって二人が一緒に味わうと、クライエントはその

物語を「自分の物語」だと確定することができるのです。そして、物語を魂から送ってくれた自分自身へのメッセージとして受け取ることができるのです。魂は、みなさん一人ひとりにあります。一人ひとりにあるということは、一人ひとりの魂です。私の魂ですから私を裏切ることはありません。私の味方なんです。だから、味方である魂からの贈り物、メッセージを受け取ると、ほっとするし、穏やかな気持ちになれ、癒やされるのです。

物語を語ったAさんは、「ああ、そういうことやったんや」と気づいて、「不思議な偶然に積み重なりによって、ここでカウンセリングを受けることになった、不思議なご縁をいただきました」とおっしゃったんです。この「不思議なご縁をいただきました」というのは、魂のレベルでの納まりなんです。魂のレベルで納まると、不思議が不思議じゃなくなるんです。これがこうあるのが本当なのだからのことなのだという思いになれるわけです。

私は、カウンセリングのなかでAさんの物語を聞きました。そのとき、私の内に別の物語がぱっと浮かんできたんです。Aさんの神さまと、こちらのお地藏さんが話し合いをなさった内容の物語が浮かび上がってきたのです。その私の物語を紹介したいと思います。

カウンセリングと宗教性

Aさんが信仰している神さまが、うちの釘抜のお地藏さんに言われます。「釘抜のお地藏さん、ちよつとちよつと。うちに子どもの頃からずつとお参りにきてはる人なんやけどね、母親との葛藤の中で女性性に傷つきのある人がいはるのです。女の人として生きづらい思いをしてはる人がいはるのやけども、私は男の神さんなので（神さまには男と女があります）男の神さまではもう一つ上手いかへんように思うのです。お地藏さん、あなたは、生きとし生けるものの母なるものでしょ。そやから、どうですやろ、この人をお地藏さんのとこで面倒見てもらえへんやろか。この人が自分の問題のみはるにはいつペン母なるもののお腹の中に入らはった方がいいように思うんです。お地藏さん、引きうけてくれはらしませんか。」

で、お地藏さんが答えはります。「そうですね。それがよろしいですなあ。あの人が癒されるためには、もう一度お母さんに包み込まれたり、抱かれたり、そういう体験の必要な場が必要ですよね。わかりました。ほんなら、神さんと私と二人してあの人を導きましょか。」というお話です。それで、あの「ふと、ふと、ふと……」が生まれたんです。

Aさんが信仰している神さまは男性の神さまです。地藏菩薩は、母なるもの、母性が象徴された菩薩です。インドのサンスクリット語で地藏菩薩は「クシテイガルバ」と言い

ます。「クシテイ」は大地、「ガルバ」は母体、子宮です。したがって、地藏とは、ありとあらゆるものの母なるものなのです。大地のあらゆるものを育み、包み、育てる力を持った菩薩が地藏菩薩です。お地藏さんは、あらゆるものの母なるものですから、お地藏さんのお寺の境内は、お母さんのお腹の中のようなものなのです。お参りの人は魂のレベルでこのことを感じる人も多く「ここへ入ったら、何や暖かいわ」「ほっとするわ」「本当に心が安らぎます」「まるで、お母さんのところへ戻ったような感じですよ」このように言わはる。これはやっぱりえらいもんです。お地藏さんの境内は、母なるもののお腹の中。だから、Aさんが自分の女性性の傷つきを癒して、その問題を扱うには、地藏菩薩という母なるものの体内に戻る必要があったのかもしれないですね。

私の物語はAさんの物語に触発されて生まれているわけですが、この物語はAさんの魂のレベルにあったものだと思うのです。でも、深いところにあるから、意識にはすぐにあがってこないのです。Aさんの魂のレベルにあるものを私の魂が感じ取って、私の魂が私に物語を作らせたんだと思うのです。もちろんこれは私が作った物語です。Aさんに語ってはいません。語らなくていいのです。私とその物語を作ったというだけで、Aさんと私が魂のレベルで繋がったからです。相手の魂と通じるということはそういうことです。

カウンセリングと宗教性

Aさんの魂はAさんに、自分の傷を癒し、女性性の問題を見ていくには、もう一度お母さんに包み込まれるような体験をしなさい、そこであなたの問題と向き合いなさい、という重要なメッセージを物語にして教えたのです。

日本人の宗教性

このAさんの作った物語の中には、もう一つ大事なことがあります。Aさんは、「自分の信仰している神さまと、こちらのお地藏さんが話し合いをなさった」という言い方をされましたが、神さまと仏さまが話し合うという言い方は、ものすごく身近ですよ。どこか「隣のおじさんと、うちのお母ちゃんが話し合ってた」という感じがするんです。でも、神さんもお地藏さんもAさんに癒しを与える霊験はあるんです。霊験あらたかやけれども身近な存在です。日本人の心の深いところには身近に「カミやホトケ」を感じながらも畏敬の念をもつ心情があります。日本人の宗教性です。

ところで、今日帰りに河原町や四条に行かれる人もあるかもしれませんが、もうあの辺に行ったらクリスマスですね。商店街にクリスマスソングが流れてるでしょ。そこら中が

クリスマスソング。うちの家でもお寺ですが孫が「おじいちゃん、クリスマスのプレゼントはこれ買うてや」そして、嫁が「お父さん、今日はクリスマスイヴですので、ケーキと一緒に食べましょう」。で、クリスマスケーキを食べながら孫たちがお母さんと会話をしています。「明日、天神さんやな」「そや、終い天神や。お母ちゃん行こか」「うん、行こう」。で、もういくつ寝るとお正月。「今年の初詣は釘拔さんにしましょう」と近所の人。一週間か十日の間に、キリスト教になって、神道になって、仏教徒になるんです。日本人ってすごいでしょ。あまり違和感ないのです。みなさんも、生まれた時には、おばあちゃんに抱かれてお宮さんに行きました。そして、いよいよ結婚も近くなってくると、「どこの教会にしょ」「あそこの教会きれいやわ」と、チャペルで結婚式を挙げます。で、亡くなる時はお坊さんに来てもらって、お経を読んでもらいます。キリストさんも、神さんも、お釈迦さんも、みんな仲良し、という感覚が、日本人の深いところにあるんです。これが日本人の宗教性です。

神社に行くと巨木にしめ縄が張ってあります。奈良に三輪神社がありますが、あそこは三輪山という山がご神体です。伏見稲荷に行くと、きつねがお迎えしてくれまます。きつねは神さまのお使いです。北野の天神さんは菅原道真公の怨霊を祀っています。怨霊を、祀

カウンセリングと宗教性

って、祀って、祀って、祀ったら、「ようけ祀ったんやから、ちょっと御利益を出しても
 らえませんか」って、菅原道真が「そんなら学問の神になつたるか」って、学問の神さま
 になっていただいて、受験シーズンにはいっぱいです。これは菅原道真という「人」を祀
 っています。日光東照宮は徳川家康、豊国神社は豊臣秀吉を祀っています。人や天皇を祀
 った神社はたくさんあります。

富士山に初日の出を拝みに行かざる。これは太陽を神さまとして拝んでいます。那智で
 は滝にしめ縄が張ってあります。那智の滝は神聖なのです。高野山の奥の院には、空海弘
 法大師が一二〇〇年間まだ生きておられます。生きておられる証拠に、お坊さんが御食事
 を持つて行かれます。そして「南無大師遍照金剛」と手を合わせられます。これは仏
 さまです。家の仏壇あるいはお墓の前では、ご先祖さまにお祈りをします。ご先祖さまの
 霊を慰めるとともに、仏となつたご先祖さまに「どうか私たちを守ってください」と、子
 孫の守りを願うわけです。

日本人は、縄文時代の大昔から今まで、山や川、大きな木、変わった石や岩、お日さん
 やお月さん、鳥獣けだもの、天皇、尊い人、仏、菩薩、宗祖（法然上人、親鸞聖人、空海弘法大師
 …）、そして、先祖（檀家さんが「うちの仏が今年三十三回忌になりましたしたんで」っ

て言わはります)、そういう、森羅万象に対して、「カミヤホトケ」と親しみながらも畏敬の念を持ち続けてきました。これが日本人の宗教性で、心の深いところを流れています。神さま仏さまにご縁ができるときには物語が生まれます。物語というのは、その個人が所属する文化の中で創造されます。だから、日本人の作る物語は、日本人の宗教性に影響されることが多いのです。

カウンセリングは、悩みを抱えるクライエントを援助するためにあります。悩みを抱えるクライエントが、癒されて、心の納まりが得られて、その中で生きることのできる物語をクライエント自身が創造することをお助けするのです。カウンセリングの過程でAさんのような物語が生まれますと、そのクライエントの物語を創造する力に、すごいな〜と、いつも感心させられます。日本人の宗教性の中で作られた物語では、「カミヤホトケ」が素晴らしい活躍を見せてくれます。そして、カウンセリングの過程を一緒に歩んできた、神さまや仏さま、ご先祖さまなど、大いなるものの存在を感じます。そういう時に、クライエントは「私は一人ではない」「自分の人生を共に歩んでくれる大いなるもの(「カミヤホトケ」)が存在するんだ」と気づかれます。これは、強いですね。人生を共に歩んでくれる、本当に強い強い味方を見つけれられたわけです。

カウンセリングと宗教性

カウンセリングは、自分に向き合わないといけません。自分に向き合うのはどこか怖いのです。怖くて、危険な、心の旅です。危険な心の旅だから守りが必要なのです。神さま、仏さま、ご先祖さまのような、大いなるものが付いていてくださっているのなら、心強い限りですね。これは私も含めて、みなさんの人生についても同じことです。

どうか、みなさんの魂を大切にしてください。そして、ご縁を大切にしてください。魂を大切にすることの一つが、仏さまとの対話です。つまり、仏さまとご縁を結ぶことです。仏さまとの対話は、自分の魂との対話に通じているから大切なのです。仏様と対話をしていますと、自分の魂からの贈り物、癒しをもらえます。祈りとは、仏さまとの一対一の対話です。一対一の不思議なご縁です。祈ることができるのは人間の特権です。祈ることのできる、魂と対話のできる仏さまとの出会い、ご縁を大切にされますよう、心よりお祈り申し上げます。「私はこの仏さまと人生を歩むんだ」、それが阿弥陀さまなら「阿弥陀さまと一緒に歩むんだ」と、阿弥陀さまとの対話をしながら、阿弥陀さまの守りの中で人生を旅することができるのなら、それは本当に幸せなことだと思えます。

ご静聴ありがとうございました。

——二〇一六年一月九日——